

赤塚公園自然を守るワークショップ みんなで見て・考えよう

ほとんどの人が自然を大事にしようとか、自然が好きとか言うのに、板橋の自然はどんどん消えていきます。赤塚公園の隣の畑はなくなり宅地になるようです。あっという間に少し前の風景が消えていきます。せめて残された公園がもう少し自然にならないか、というのが私たちの願いです。そのささやかな会の活動も5年がたちました。

自然にするということはどういうことなのでしょうか。自然保護活動というと、下草刈りをして武蔵野の雑木林の景観を維持することが同義語になっていますが、それでよいのか。都会にあって比較的自然が残されている赤塚公園の将来の姿を考え、これまでやってきたことの反省や、どんなことが可能なのか、私たちのできることは？などざっくばらんに話し合いませんか。

日時：4月27日(土) 10:00～15:00

集合場所：美術館前

スケジュール：10:00～12:00赤塚公園の観察

12:00～13:00昼食

13:00～13:30総会(赤塚5丁目集会所)

13:30～15:00「赤塚公園の自然について言いたいこと」

いつものようにビールを飲んで元気をつけます。

持ち物：弁当、飲み物、名札(ない人は事務局で用意します)、筆記用具など

赤塚公園について、気になったこと・改善したいこと・提案などは、写真などがあるとみんなが理解しやすいと思います。参加費500円

その他：総会の会場は赤塚5丁目集会所(大仏の近く)です。

会員でない方も参加できます。いつも参加できない方もぜひご参加下さい。

水と緑の会 一年間の活動を振り返って

「自然をとりもどしたい」と手を加えたことで、どんな影響があったか、それはどう変化していくか、じっくり様子を見たり、調査をすることが、ますます大切になってきました。それと公園にこられた人たちに自然を理解してもらえるような努力が必要です。

バッタ広場

草を刈らないというだけで、すぐにバッタやカマキリいっぱいやってきました。こんなことでこんなに自然が戻ってくるものかと驚くばかり。藤本先生はじめ多くの先生方が注目している草原ビオトープになっています。柵を作った2000年4月から草刈りをしていません。夏と秋に植生調査を実施。どう変化するか継続して調べます。また夏のトラップ



調査ではアオオサムシがかりました。草原が汚いという苦情が公園管理所に寄せられているそうです。ゴミ拾いや柵の修理を定期的にしてバッタ広場が嫌われないようにしないとね。みなさんも立ち寄られたときはよろしく。

斜面林の柵

斜面林に人が入り、通り道ができ、そこに雨水の水みちができていました。斜面林を守るため1999年6月に柵を作りました(写真左)。右は3年近くたった今年の冬。アズマネザサが茂り、水みちも、通り道も目立たなくなりました。



斜面の下から見ると(写真下)、土砂がえぐれているのがわかります。山に登る急な階段も林床を痛めつけた原因でしょう。斜面林全体に下草が茂り、表土を守るには、さらにどんな方法があるのでしょうか。

自然の池は管理がむずかしい…3つの自然池の状況



美術館の自然池はザリガニ対策の1年でした。2年ぶりのかいぼりを行い、池が深いと水草が生えにくいので試験的に土を入れて湿地にし、荒川の水草を植えました。しかしかたいキシウスズメノヒエ以外の水草は夏には全滅しました。箱舟はかいぼりのときに池底に下ろしたままだったので、中にザリガニが入って大増殖していました(写真。2月の調査で425匹を記録)。その大量のザリガニのなかでコシアキ

トンボのヤゴが1匹いました。粗朶や水草が隠れ場となったようです。ザリガニ中心の池にはいろいろありますが、デッキブラシで磨いていたコンクリの池から土の池になったことで、自然度がアップし、ザリガニにとって最高の環境となったことは確かです。しかし目的はザリガニ池ではないし、ヘビトンボがいた湧水水路の環境を守るためにもみんなですれればいいのか考えたい(もっと浅くする、粗朶を大量に入れる等)。なにか名案はありませんか？

徳丸が原公園は浅いので、ザリガニも数いますが、水草もあり、池の中は赤塚の自然池より条件がよさそうです。

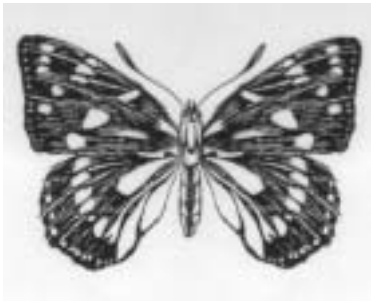
乗蓮寺下の池は、人目に触れない場所だけに自然に保たれています。真っ赤なキンギョがいなくて、池周辺の草むらが自然のままだと「言うことなし」なのですが…

尻切れトンボになった竹の利用

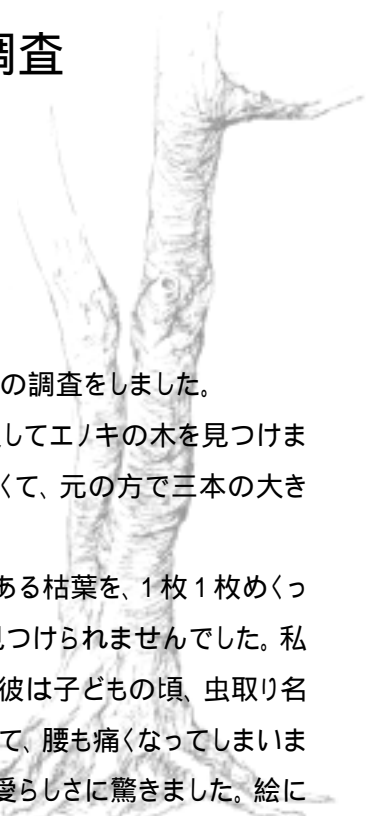
2年前に竹林の奥に剪定枝や竹の山ができました。私たち市民団体では資材の運搬ができないので、私たちが活動しやすいようにとの心遣いでした。柵や柴垣づくりに、工作に、イベント時に竹の花入れをつくるなど大いに活用しました。自然材の柵は自然に戻るし、壊れたらまた作ればいい。ただし汚いと思われないよう、こまめな修理などの管理が必要です。野積み済みされたその竹も剪定枝も雨ざらしで自然に戻りつつあります。あか道の柴柵も杭が抜かれていました。もう御用済みなのかもしれません。

公園の一部を目的をはっきりさせて管理させてもらいながら、不要になったものを活用して楽しめるようなプログラムができるといいですね。

その他いろいろありました…初めての長野合宿と草原管理体験・雨で室内工作になった自然発見ウォーキング・荒川鳴く虫観察会・トラップによる昆虫調査・草原植生調査・新年会と昆虫勉強会・目黒自然教育園見学・徳丸が原公園、そして梅まつりに参加等



ゴマダラチョウの幼虫調査



2月16日(土)午後晴れ安養院にてゴマダラチョウの越冬している幼虫の調査をしました。ゴマダラチョウの幼虫はエノキの枯葉の裏で冬を越すので、まず枯葉を捜してエノキの木を見つけます。(エノキの葉の特徴は図のように、左右対称ではありません。葉は薄くて、元の方で三本の大きな脈に分かれる。幹は横に筋がはいっている)

お墓の側の大きな木の下に座り込み、幹から半径30センチ位のところにある枯葉を、1枚1枚めくって裏を調べます、1時間以上葉をめくり続けても、老眼の目では、1匹も見つけれませんでした。私と同じ木の下で捜した人はすごいスピードで葉を裏返し3匹も見つけた。彼は子どもの頃、虫取り名人と言われていたそうです。私は1時間以上も足場の悪い所に座り続けて、腰も痛くなってしまいました。他の人が見つけた、ゴマダラチョウの幼虫を見た時は、余りの可愛らしさに驚きました。絵に

も描きましたが、しばらく眺めていると、越冬中のはずが、居心地が悪いためか、動き出してしまいます。正面から見ると三角形の小さな顔に、少し離れた黒いつぶらなひとみ、触覚が耳のように見えてまるでピカチュウのモデルのように見えました。



幼虫

エノキの新芽が出る頃になると、この2、3センチの小さな幼虫は木に登る大冒険を経て、さなぎとなり

りやがてゴマダラチョウとなります。幼虫は調査の後、もとの場所に戻しました。

エノキがあり、落ち葉を片づけずにそっとしておく。そのことがゴマダラチョウを守っているのですね。エノキにはゴマダラチョウだけでなく、オオムラサキ、ヒオドシチョウの食葉でもあるということです。

エノキは4、5月頃には淡い黄色い花をつけ、秋にはオレンジ色の甘くて美味しい実をつけ、オナガ、ムクドリ、ヒヨドリなどの鳥の大好物でもあります。

三島先生の講演でも、先生は落ち葉は木のふとん、落ち葉はやがて朽ちて土となりその木の栄養となります。落ち葉を片づけ続けると、やがて木は枯れるとも、言っておられました。一本の木を守ると言うことは、落ち葉を片づけすぎず、枝を切りすぎず、そっと見ている、そういう事がとても大切と思いました(瀬田 政江)。

なぜ生き物を放してはいけないのか

美術館前のピオトープ池で今、メダカがたくさん泳いでいる。黒っぽい野性型に混じってヒメダカも水面に浮かんでいる。気付いたのは3月10日の朝、先週の土曜日にはこんなにはいなかった。多分誰かが放したのであろう。この機会になぜメダカを放してはいけないのか、なぜよそから生物を連れて来て放してはいけないのか考えてみよう。最初に断っておくが、私は動植物の移植放流の絶対否定論者ではない。

イワナの例から

山奥の溪流にイワナという魚が住んでいる。サケの仲間では今では養殖が行われているので、たまにはスーパーにならんでいたりするので、目にした方もたくさんいるであろう。20年数年前には溪流釣をやる人以外は食べたことがある人はほとんどいなかった筈である。味はともかく、姿形では日本のイワナは大きく二つに分けられる、色が白っぽい北日本型と色の濃い南日本型である。境は太平洋側では岩手県から宮城県あたり、日本海側では石川から福井県くらいである。

イワナは本来サケと同様、海と川を行き来する魚で、実は白っぽい北日本型は川で生まれ、海に下り成長し、また川に帰ってくるタイプ(一回こっきりのサケと違い数年繰り返す)である。冷たい水を好むイワナは下流部の水温が上がってしまうと、海に帰れなくなってしまい、一生を淡水で暮らすことになってしまう。これが南日本型で、陸封型という。

海に帰ったイワナは沿岸部を回遊し、育った川と別の川に戻ることも多いようである(母川回帰率のデータは未見)。北日本のイワナはどこで釣っても同じような顔つきをしているのは、あちこちで育ったものが混じりあうからであろうと推測されている。

海と切り離され、川の上流部に閉じ込められてしまったイワナは孤立し、よそ者とは付き合えなくなる。日光のイワナと秩父のイワナは少し体つきが違う、紀伊半島と中国地方のイワナは別亜種だ、などと分類学者が言い出すことになる。私などは釣ってもすぐ食べてしまう方だったのでよく分からないが、東北、北陸のイワナに比べると関東、中部のものは変異が多いような気がする。

この違いはいつから出来てきたのかというと、たかだか1万年くらい前、氷河時代は終わって気温が上昇してからであろうと推測されている。地球上では最近の100万年間に数回に氷期、間氷期を繰り返しているが、その度に同じようなことを繰り返していたのであろう。地方毎に個体群が分化し、また交じり合い同じになってしまうということ。

今は間氷期で、イワナは分化しつつある筈である。所が今、日本のイワナは地方色を失いつつある。なぜかという、人為放流のためである。イワナの養殖の成功はヤマメの後、数年後であったと思う、まだ30年は経っていない。稚魚期最初に餌を食いつかせるのが最後の難関であったと記憶している(資料にあたる時間がなく書いているので記憶違いがあるかもしれない)。対象になったのは北

海道産の降海型イワナ(アメマス)である。生理的な性質が違うのか、陸封型では成功しなかったようである。以後、この降海型イワナの子孫が日本国中にばらまかれることになった。関東以南の原住民である陸封型イワナは新住民と混血するか、最上流部に閉じ込めら、滅びを待つかになってしまった。

水産試験所の使命は食糧増産(戦後はまだ生きている)であり、自然保護ではない。当然のことであろう、ただし国民の栄養食糧としてのイワナの価値は終わっている(元から一部地域でしか利用されていなかった)のは間違いない。

(釣巻岳人)

干場先生の話と我が家のアシナガバチのこと

アシナガバチのこと

ベランダにアシナガバチガが、数年前から巣を作って毎年巣立って行く。その作っている様子を毎日眺めていると、いろいろな事が分ってくる。

アシナガバチの巣作りを見ていると最初は二、三匹でつくっているのですが、どんどん巣作りに参加するハチが増えて、巣作りのスピードが上がり、巣はどんどん大きくなります。

先生の話によると、アシナガバチは最初女王バチが来て巣をつくり、卵を産み、それが育ってハチになるとそのハチも巣作りに加わります。女王バチはさらに卵を産み続け、生まれたハチ達はみな、巣作りや生まれた幼虫の世話をする働きバチになります。女王バチは体の中に精子を貯めておき、受精卵(雌になる)、未受精卵(雄になる)を産み分けるそうです。

働きバチが雌というのは人間社会と違いますね。私はアシナガバチに生まれなくて良かった。卵を産むのも雌、巣を作るのも雌、幼虫に餌を運ぶのも雌、でも雄は雌バチと交尾するとすぐに死んでしまうそうです。

私の家で昨年、二、三段の小さな巣のまま、ハチが巣を放棄してしまった例があったので先生にうかがったところ、生まれたハチが雄だったため働き手がいなくなって、巣を作らずに放棄してしまうこともあるそうです。アシナガバチの世界は不思議だ。



セグロアシナガバチと途中で放棄したアシナガバチ

こんなに面白いハチでも、巣を作るとすぐに、保健所や、区役所に連絡して捨てられてしまう場合もあるのに、私の隣の家には大きな巣が四つもあったので、お願いして頂きました。ほとんど緑もないような所でアシナガバチはけっこうたくましく生きているものです。

「ミツバチと農業のこと」

蜂蜜にセイヨウミツバチばかりが飼育されるようになって、ニホンミツバチは追われてしまったけれども、近頃ニホンミツバチは都会で復活してきているらしい。都会では四季を通じて蜜源植物があり、外敵がないなどの条件がそろっているのです。ところが地方では、ゴルフ場が出来るとその付近からハチがいなくなってしまうそうです。大量の農薬を使うためだとか、人間の体にとっても良いわけではないですね。

「ピオトープ」

また水とみどりの会でも関わっているピオトープについて、干場先生の意見は、ピオトープは自然回復の場であり、人々の憩いの場として必要、また皆で自然回復を考える場所として有効ということでした（瀬田政江）。

梅まつり 水と緑の会のコーナーは大盛況！井上さん復帰

3月2日(土)、3日(日)の梅まつりに水と緑の会は例年通り参加しました。2日はポカポカ陽気でしたが、3日は、冬の寒さがもどり、手がかじかんで困りました。今年は、子供達にノコギリをひく体験をさせたいということで、丸太を薄切りにして鍋敷きや表札に、細い枝の薄切りはペンダントにというコーナーだったのですが、企画が当たり、食事をするひまがないほどの人気でした。切った板に熱中して絵を描く子供たちの姿はほほえましく、絵もなかなかなものです。子供たちばかりでなく年配の男性も女性もギコギコやっていました。真田さんが会のノコギリを持ち帰って目立てして下さり、道具は万全。鈴木会長さんも2日ともおてつだいいただきました。うれしいことに交通事故で10月からお休みだった井上さんが復帰、2日とも活躍されました。



瀬田さん宅に出没していたタヌキが交通事故死！！

板橋区にいた動物として区役所で剥製にして残してもらえないかしら、という願いもむなしく、あえなく処分されました。その後、息子とおぼしく小さめのタヌキを見かけたとのこと。

活動のお知らせ

問合せは：瀬田まで（3969）7124

運営委員会は毎月第1金曜日です。興味のある方はぜひご参加ください。

4月運営委員会 4月5日(金)18:30~20:30 エコポリスセンター

5月運営委員会 5月2日(木)18:30~20:30 エコポリスセンター

3日は連休中なので、定例の運営委員会は1日ずらしました。

会報の印刷・発送は奇数月の15日。お手伝いできる方は応援よろしく

日時：5月15日(水)17:30~ 場 所：エコポリスセンター

赤塚公園春の観察会

日時：4月5日(土)10:00~13:30

場所：美術館前集合

内容：城址周辺の観察と清掃・補修

その他：終わったらお花見を兼ねてお弁当を食べましょう。

総会

日時、会場は1頁参照

目黒自然教育園

都会のど真ん中で自然のまま(手を加えないで)維持されている公園です。ドングリもオシドリの餌になるからとってはいけないのだそうです。私たちの活動にとってもたいへん勉強になるフィールドです。

日時：5月11日(土)10:00~12:00

集合場所：目黒自然教育園前(JR目黒駅下車または三田線白金台駅)

持ち物：あれば双眼鏡、ルーペ、図鑑、筆記用具など

徳丸が原公園の自然池調査

池の状況、植物、生物(トンボのヤゴがいるかなど)を調査します。

日時：5月25日(土)10:00~12:00

場所：徳丸が原公園池(池は高島第1小学校の向かい側)

持ち物：長靴、網、図鑑、ルーペなど

桜美林大学オープンカレッジで、あの三島次郎先生の連続講座があります

「生態学から見た自然 自然を友とするために」5/10~7/12(毎週火曜日)

14:30~16:00、受講料は22000円

申し込みは：電話(5304)5381、FAX(5304)5383

14年度会費納入のお願い 会費は2000円です。カンパ大歓迎。